

令和 元年 6 月 28 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K08726

研究課題名(和文) 住民参加型自殺予防対策の効果に関する実証的検証研究

研究課題名(英文) The empirical verification study of effect of resident participation suicide prevention program

研究代表者

佐々木 久長 (Sasaki, Hisanaga)

秋田大学・医学系研究科・准教授

研究者番号：70205855

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：ゲートキーパー養成のための資料を作成して実施した養成講座受講者を対象とした調査で、住民は身近に心配な人がいることを認識しており、機会があれば支援したいという気持ちを持っていることが確認できた。地域で自殺対策に取り組んでいるボランティアを対象に調査を行った。この結果、居場所づくりを通して、希死念慮や抑うつ状態にある人との接点を持っていることが確認された。また保健師を対象にしたインタビュー調査で、保健師がボランティアを支援すること、ボランティアが地域の情報を提供し見守りをするすることで、より効果的な自殺対策を展開する可能性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

住民参加型自殺予防対策が、希死念慮を抱く住民との接点を持つことと、行政担当者や専門機関との連携を通して、自殺者の減少に関与している可能性を示すことができた。この結果は、ボランティアにとって活動の意義を確認することができたという社会的意義があった。本研究を通して作成した資料は、改善を重ね現在まで約2000名以上のボランティア養成に活用されている。

研究成果の概要(英文)：Gatekeeper training program participant recognize that there is a person needing support in the community, and they want to support them. The investigated it in the volunteers who worked on suicide prevention, they contact with the person who have suicide ideation or the depressed state at salon (Ibasho). Through an investigation for the community health nurse, community health nurse support a volunteer and a volunteer offer local information to the community health nurse and watch attentively were suggested that develop effective suicide prevention

研究分野：健康科学

キーワード：自殺対策 ボランティア 保健師 連携

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地域での自殺予防対策に住民が参加するようになって 20 年ほど経過した。その間多くのボランティアが養成され、地域でサロン活動を展開してきた。ボランティアとして参加している住民のメンタルヘルスや自殺対策についてのリテラシーが向上することは明らかになってきたが、活動の実態や効果については検証されていなかった。

2. 研究の目的

地域での自殺対策にボランティアとして参加している住民を対象に、どのように地域の自殺予防対策に参加したかを検証し、自殺率に低下に寄与した要因を明らかにする。さらに今後地域の自殺予防対策を継続的に実施するために必要な条件を検討し、養成されたボランティアが地域の自殺予防対策の主体的役割を担う可能性を模索することを目的とした。

3. 研究の方法

(1) 自殺予防対策を目的として養成されたボランティアの実態把握と自殺者数との関係

平成 16-26 年度に A 県内で養成されたボランティア(メンタルヘルスサポーターや傾聴ボランティア)数を市町村ごとに調べ、その集計結果と同時期の自殺者数の増減を比較した。

(2) 自殺予防対策に取り組んでいるメンタルヘルスサポーター 35 人を対象に予備的調査を実施した。主な調査内容は「活動期間」「相談内容」である。

(3) メンタルヘルスサポーターフォローアップ研修会参加者 185 人を対象にした予備的調査を実施した。主な調査内容は「希死念慮を訴えられた経験」と「その後の対応」である。

(4) A 県内で開催されたボランティア(心はれればゲートキーパー)養成講座参加者 592 人を対象に、「活動への意欲」「地域の状況」などについてアンケート調査を実施した。なお、養成講座で使用する資料(スライド)も作成した。

(5) 保健所(2 箇所)、市町村(4 箇所)の保健師を対象に、「自殺予防対策の状況」「地域で活動するボランティアの役割」についてヒアリング調査を行なった。また過去 3 年間の自殺者をふり返り、住民がどのように関わっていたと思われるかについてインタビュー形式で情報を得た。

(6) A 県内 17 市町村、B 県 2 市町、C 県 3 市町のボランティア 1000 人を対象にアンケート調査を実施した。主な調査内容は「活動を通して関わった人の自殺関連行動の実態」「自分たちの活動の評価」などである。

4. 研究成果

(1) 自殺予防対策を目的として養成されたボランティアの実態把握と自殺者数との関係

平成 16-26 年にかけて A 県内では延べ 4129 人が養成講座を受講していた。期間中平成 21 年は 280 人だったのが平成 24 年は 659 人に急増し、その後はほぼ横ばいであった。養成講座受講者が急増した期間は、自殺者数が 416 人(平成 21 年)から 293 人(平成 24 年)と大きく減少した期間と重なっていた。その後の養成講座受講者数が横ばいの期間は、自殺者数が大きく減少していなかった。以上の結果から、養成講座という手法が自殺者数を減少させることに一定の成果が期待できることが示唆された。

(2) 自殺予防対策に取り組んでいるメンタルヘルスサポーターを対象にした予備的調査

メンタルヘルスサポーターとしての活動期間は 6 年以上が 93.9%で、11 年以上も 24.2%であった。このように長期にわたり活動を継続している背景には、保健師が活動をサポートしていることと養成講座終了後のフォローアップ研修会が影響していると考えられた。60.0%が活動を通して相談されたことがあり、その内容は「健康問題」「家庭問題」「経済・生活問題」が多かった。これらは自殺の要因とされているものと一致しており、相談が自殺につながるリスクを軽減している可能性が示された。

(3) A 県内のメンタルヘルスサポーター 185 人の中で 53.2%が「死にたい」という訴えを受け止めていたが、その内 45.8%は「死にたい」と言われたことを相談していなかった。この結果はメンタルヘルスサポーターが一人で抱え込んでいることを示している。この結果から、メンタルヘルスサポーターも「つなぐ」「つながる」必要があることが示された。

(4) A 県内で開催された「心はれればゲートキーパー」養成講座受講者 415 人から回答を得た。ゲートキーパーの役割である「気づき」「声かけ」「つなぎ」について、それぞれ 30%前後が積極的に役割を果たしたいと考えていた。23.1%が「今、地域で心配な人がいる」と回答していたが、「いない」群に比べて活動への積極性が低かった。これは具体的な事例があることで困難感がより実感できたことが影響していると考えられた。

(5) 保健所・市町村の保健師を対象に行なったヒアリング調査では、ボランティアがサロン活動等で心配な住民とつながることで、安定することが多いという印象を持っていた。一方で現在生じている自殺について、住民と協働しながら新たな取り組みを検討したいという期待もあった。

(6) 3 県の 22 市町村で活動しているボランティア 1000 人を対象に行なった調査では 518 人から回答を得た。11.8%が活動を通して関わった人の自殺を、5.6%が自殺未遂を、そして 21.2%が希死念慮の訴えを受け止めていた。また 54.4%が自殺した人のことを、25.5%が自殺のリスクを感じる人のことをメンバー同士で話し合っていた。16.1%は「自分たちの活動は地

域の自殺を減らすために役立っている」と、45.8%は「どちらかといえば役立っている」と評価していた。これらの結果には地域差があり、今後地域の自殺の実態との関連を分析する予定である。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計5件)

Sasaki H, Iwata T, Maeda E, Murata K, An Analysis of Factors Associated with Personal and Perceived Stigma Against Talking About Suicide in a Rural Japanese Community. *Akita Journal of Medicine*, 査読有、45 巻 2018、113-120

Yong Kim Fong Roseline, 豊島優人、藤田幸司、佐々木久長、ひきこもりと生活習慣、心理社会的要因およびソーシャルキャピタルとの関連、*秋田県公衆衛生学雑誌*、査読有、14 巻、2018、22-28

播摩優子、佐々木久長、メンタルヘルスサポーターの自己効力感と活動による意識・態度・行動の変化に関する自己評価、*秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要*、査読有、26 巻1号、2018、79-86

佐々木久長、一般住民に対するゲートキーパー~フォローアップの大切さとサポーターとの役割分担、自殺予防と危機介入、査読無、36 巻2号、2016、31-32

備前由紀子、佐々木久長、高齢者における希死念慮と二次元レジリエンス要因との関連、*秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻紀要*、査読有、24 巻1号、2016、53-66

[学会発表](計26件)

Roseline Yong, Hisanaga Sasaki, Koji Fujita, Kyoko Nomura, The association between hikikomori and mental problems : a national cross-sectional study, The 23rd World Congress of International Association of Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions, 2018

藤田幸司、松永博子、小川将、佐々木久長、高齢者の自殺を防ぐために地域社会で何ができるか、*日本老年社会科学会第60回大会*、2018

播摩優子、萩原智代、佐々木久長、藤田幸司、松永博子、金子善博、本橋豊、地域住民の気死念慮と生活支援、就労支援窓口および生活困窮者支援制度の周知との関連、*第77回日本公衆衛生学会*、2018

藤田幸司、松永博子、佐々木久長、播摩優子、金子善博、本橋豊、社会参加をしていない高齢者の特徴とその関連要因：地域高齢者の包括的自殺対策に向けて、*第77回日本公衆衛生学会*、2018

Roseline Yong、藤田幸司、佐々木久長、Indicators for hikikomori in rural Japan: Jobless and loneliness、*第77回日本公衆衛生学会*、2018

松永博子、藤田幸司、佐々木久長、本橋豊、地域高齢者の被援助志向性と心のストレス、自己効力感との関連、*第13回日本応用老年学会大会*、2018

ヨン・ロザリン、佐々木久長、地域公衆衛生の現場：研究と実践の循環-長期ひきこもりの社会復帰に関する壁、*秋田県公衆衛生学会*、2018

ヨン・ロザリン、地域取り組み交流会~自殺の現象、自殺対策ミニシンポジウム(日韓対話) 2018

佐々木久長、地域取り組み交流会~自殺対策には国境がない、自殺対策ミニシンポジウム(日韓対話) 2018

藤田幸司、佐々木久長、多世代参加コミュニティ・エンパワメントの実践による地域づくり型自殺対策の効果、*第76回日本公衆衛生学会*、2017

Koji Fujita, Roseline Yong, Hisanaga Sasaki, Yoshihiro Kaneko, Akira Ebishida, Yutaka Motohasi, The Relationship Between Social Participation and Psychological Distress Among Community-Dwelling Elderly Adults, The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, 2016

Roseline Yong, Koji Fujita, Hisanaga Sasaki, Yoshihiro Kaneko, The characteristics differences between the younger and older hikikomori people, The 7th Asia Pacific Regional Conference of the International Association for Suicide Prevention, 2016
播摩優子、備前由紀子、佐々木久長、高齢者の自殺に対する反応-高齢者と若年者の特徴、*第40回日本自殺予防学会*、2016

備前由紀子、播摩優子、佐々木久長、高齢者における二次元レジリエンス要因と自殺の理解度の関連、*第40回日本自殺予防学会*、2016

佐々木久長、備前由紀子、播摩優子、高齢者のレジリエンスと自殺による喪失体験の関連、*第40回日本自殺予防学会*、2016

藤田幸司、Yong Roseline、金子善博、佐々木久長、播摩優子、烏帽子田彰、本橋豊、コミュニティ・エンパワメントによる社会参加型自殺対策の効果に関する研究、*第75回日本公衆衛生学会*、2016

Yong Roseline、藤田幸司、金子善博、佐々木久長、地域住民におけるひきこもりの予防因子

に関する分析：コホート研究、第 40 回日本自殺予防学会、2016

播摩優子、萩原智代、佐々木久長、金子善博、藤田幸司、自殺に対する反応に関連する要因の年代別分析、第 40 回日本自殺予防学会、2016

ヨン・ロザリン、藤田幸司、金子善博、佐々木久長、地域における若者のひきこもりの予測因子に関する分析：コホート研究-自殺念慮と相談相手ながひきこもりになる予測因子、第 32 回日本精神衛生学会大会

Fujita K, Kaneko Y, Sasaki H, The Impact of Cognitive Decline and Fear of Dementia on Mental Health of the Elderly People, GSA 2015 Annual Meeting, 2015

- 21 佐々木久長、一般住民に対するゲートキーパー、第 39 回日本自殺予防学会シンポジウム(招待講演)、2015
- 22 播摩優子、備前由紀子、佐々木久長、「自殺は容認できないが理解できる」態度に関連する要因、第 39 回日本自殺予防学会、2015
- 23 備前由紀子、播摩優子、佐々木久長、高齢者における希死念慮と二次元レジリエンス要因尺度との関連、第 39 回日本自殺予防学会、2015
- 24 佐々木久長、播摩優子、金子善博、藤田幸司、本橋豊、自殺高率地域の住民のストレス対処行動：9 年間の変化、第 74 回日本公衆衛生学会、2015
- 25 藤田幸司、金子善博、佐々木久長、播摩優子、烏帽子田彰、本橋豊、地域高齢者における認知症への不安、認知機能低下の自覚とメンタルヘルスの関連、第 74 回日本公衆衛生学会、2015
- 26 金子善博、藤田幸司、佐々木久長、本橋豊、中山間地域における配偶者のいない中高年男性のメンタルヘルスと社会的交流について、第 74 回日本公衆衛生学会、2015

〔その他〕

心はればれゲートキーパー養成講座資料(スライド)

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：ヨン ロザリン

ローマ字氏名：Yong Roseline

所属研究機関名：秋田大学

部局名：大学院医学系研究科公衆衛生学講座

職名：助教

研究者番号(8桁): 40771796

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。